天正本太平記の性格

*長坂成行

『太平記』の、特に諸本研究が『平家』の場合程深化を見せておらず研究状況も比較的不活発であることは、『平家』の例えば延慶本・長門本・源平盛衰記等増補系諸本の活気に満ちた研究動向を引き合いに出すまでもない。[1] その最大の理由としては、『太平記』の場合本文のゆれが小さく、問題にすべき箇所が多くないということが挙げられよう。確かに天正本の類を除いては、四十巻全体に亘って注目すべき本文傾向を有する伝本は少ない。とは言え小さい乍らも存する本文異同が『太平記』の性格、或いは成立・変容を探るための手懸りを与えてくれることもまた事実である。例えば京大本系統の伝本にみる特異な人名表記・巻分割のあり方、前田家本・米沢本等の独自異文の問題などは検討に値する。近時また、諸本間の差異ばかりに注目するのではなく、むしろ本文の共通部分に目を向けることによって『太平記』を捉えるという方法論上の新しい視点も提言されている。[2] そうした動向は確実に存在し、かつ重要であると認識しはするものの、私としては先ず諸本の実態・性格を微視的に検討するといういささかオーソドックスな方法で作業を積み重ねておきたく思う。

『太平記』諸本の中で最も特異な伝本である天正本の類については鈴木登美恵氏の先駆的業績[3]があり、その性格に一応の見通しはついているが、肝心の天正本が未刊[4]のため写真に拠らねばならない（『参考太平記』でおおよその目処はつくが正確は期し難い）という物理的悪条件の故か、その検証には未だしの所がある。旧稿[5]で私は天正本の記録的側面に注目し、その依拠資料を探ることから成立圏を佐々木導誉父子・二条良基の線に求めたのであるが、少しく性急な結論に走り過ぎたようである。小稿では天正本のいま一つの側面、即ち鈴木氏の謂[6]を借りるならば通俗的な抒情性・物語性の増加という点に主眼を置きその性格を検討する。その際あくまで天正本独自の表現世界の解明ということを目標にし、成立論への短絡はなるべく避けたい。

一、文末表現の特徴

天正本を通読して行った際、まず気付くことは、一つの話或いは一つの章段の末尾に来る結びの文に、特定の傾向が見えることである。説話文学においてその話末評語が問題にされるのと同様、軍記の文末評語は一つの話をまとめる働きを持ち、著述者がその話を提示した意図・態度を述べるものとして重要である。勿論、話材と文末評語との間に不整合と認め得るものが存する場合もあろうが、その場合にはそうした不整合が生じた理由、即ち著述者と我々享受者との間の視点の

*国文学研究室（1978年9月30日受理）

ずれが問われるべきで、いずれにせよ文末評語はその長短にかかわらず無視し難い。

例えば巻一「立后の事付三位殿御局の事」の章段で、後醍醐天皇の寵姫について、西園寺実兼の女藤原禧子には寵愛なく、帝は専ら阿野廉子を愛したとする。ために廉子は権を振い准后にまで至り評定雑訴にも介入したという。その後に次の詞章が来てこの章段を結ぶ。

いかがせん、傾城傾国の乱れ、今にありぬと覚えて、あさましかりし事ども なり。（『新校本』11頁）⑦

これは前述の事象に対する著述者の論評の表出である。著述者は廉子の如き存在、ひいては廉子の身勝手な行動を黙認する後醍醐の態度が国の乱れを誘発するとみて「あさまし」と言う。二姫の対照的状況という事実を叙するのみでも著述者の意図、即ち廉子への批判的姿勢は読み取り得るにもかかわらず、著述者は自己の態度をわざわざ文字として前面に押し出す。古態とされる本文ではこうした文末評語（多くは批判的言辞に限る）は最小限にとどまるようであるが、それが天正本では顕著な一定の志向を見せてくる。

巻二から例を引く。「東使上洛円観文観等召捕事」において倒幕密議参加の嫌疑で六波羅に逮捕された二条為明について次のように記す。

為明卿ノ事ニ於テハ、先六波羅ニテ尋問シニ、白状アラバ関東ヘ注進スベシトテ、六波ラノ検断糟谷ノ刑部左衛門尉ヲ承テ既ニ拷問シテ沙汰ニ及バントス。(A)其有様見モ誠ニ恐シヤナ。六波羅ノ小壺ニ炭ノ（中略）。是四重五逆ノ罪人ノ焦熱大焦熱ノ炎ニ身ヲ焦ル、牛頭馬頭ノ呵責ニ逢覧ニ角ゾト覚テ、(B)見物ヲ面ヲゾ掩ケル。（中略）此哥（注、思キヤ我シキ嶋ノ道ナラデ浮世ノ事ヲ問ルベシトハ）ノ感ニ依テ、拷問ノ責ヲ止ケル六波羅ノ心ノ中コソ優ケレ。(C)理リヤ、力ヲモ入ズシテ天地ヲ動シ、目ニ見ヘヌ鬼神ヲモ哀ト思ハセ、男女ノ中ヲモ和ゲ、武キ物ノ夫ノ心ヲ慰ルハ謂也、ト紀貫之ガ古今ノ序ニ書タリシ詞(D)ノ未更ニ思知レツヽ聞人モ袖ヲゾヌラサレケル。（『新校本』29頁相当）⑧

傍線部分はそれぞれに天正本の文末表現の特徴を端的に示している。二条為明の拷問の具体的様相は「六波羅ノ小壺ニ」以下中略した箇所に丁寧な叙述がありその恐しさは説明を要さない。にもかかわらず天正本は(A)で「其有様見モ誠ニ恐シヤナ」と説明を付加している。(A)は古態本である神田本・玄玖本には欠ける。(B)・(D)では見物の人、或いは聴衆が登場し、その人の感想・行動を記すことによってある現象・事象に対する著述者の態度を表出する。この天正本のあり方は、結局の所、一つの事象を記してそのまま放り出し解釈は享受者に任せるというのではなく、著述者自らが何らかの評価・解釈を下していると言えよう。換言すればそれだけ他本よりも著述者の意識が前面に押し出されている。

それではこうした文末表現に如何なる意識が顕れているのか。(B)・(D)等がその典型である。(B)では二条為明に対する拷問の凄絶さを予想し見物人がそれを見るに堪えず面をおおうという。(D)の部分、神田本・玄玖本には「も理なりと覚えたり」とある。天正本も(C)で「理リヤ」としながらも、右に掲げた説話全体を歌の徳によって拷問をまぬかれた感動的な話としてまとめあげている。「聞人」の「袖ヲゾヌラ」したものは感動の涙であろう。その他天正本は全体を通じて〈悲し〉・〈哀れ〉・〈涙〉など悲哀・感傷的情調を強調する文末表現が極めて多い。例えば巻二「資朝誅戮幷阿新翔事」の末尾は次のように結ぶ。

サテ阿新殿ハ、無ㇾ恙成人シテ南朝ノ君ニ仕テ、日野ノ一跡ヲ光栄シテ中納言国光トゾ申ケル。哀ニヤサシカリシ事共トテ、聞人

モ袖ヲゾ濡リケル。　（『新校本』43頁相当）

父資朝の仇を討った少年阿新の智力と行動を聴衆と共に「哀ニヤサシカリシ事」と称えている。同じく巻二「俊基朝臣誅戮事」から同様の表現を列挙しておく。

。日数ニ命ノ近クヲ想像コソ痛ハシケレ。

。行合人ニ問レ之、泪ヲ袖ノシルベニテ程無鎌倉ニゾ着ケル。

。互ニ袖ヲ顔ニ押当テ物モ不レ言ケル主従ノ心ノ中推量セラレテ哀也。

。主従ノ眤ト云乍哀レニ覚ケレバ、見物毎ニ推ナベテ袖ヲ濡ヌハ無リケリ。　（『新校本』44・45頁相当）

この章段は日野俊基の刑死という話材ゆえ、生者と死者の別離の悲しみが表現されるのは当然だが、天正本は他本を上回って〈涙〉・〈哀〉を強調しており注目すべきである。このように天正本の著述者の意識は、個人に対する同情・感傷、或いは感動など専ら私的な心情のレベルに終始し、例えば時勢批判・政道批判といった公的な或いは高次な問題には至らない。このことは天正本が「見物」・「聞人」などの所謂享受者、恐らくはそれほど高尚ではない大衆的聴衆との交渉を基盤に形成されたであろうことを予想させる。

二、悲劇的場面における増補

前節で天正本の文末表現には感傷的情調を志向する傾向があると述べたが、これと通じる現象を挙げておきたい。小題に「増補」としたが、これは「記事量の増加」と換言した方が正確である。即ち記事の多少のみを問題にしており、記事の新旧は問わない。

『太平記』における典型的な悲劇的場面の一つに巻二十一「塩冶判官讒死の事」がある。思わぬきっかけから塩冶高貞の妻に横恋慕した高師直が、その妻を奪い取るため、理不尽にも塩冶に謀叛の汚名を着せる。師直方の追討を受けた塩冶は出雲にのがれんとするも、途中妻は殺され塩冶も自害して終わるという惨劇は周知である。一連の高師直兄弟横暴説話の一つとして捉えるべきであろうし、或いは塩冶判官を宮方に引き込む動きがあったとかの議論はすべて措き、以下天正本の表現態度のみに係る。

播磨国蔭山で師直方の桃井直常の軍に追到された塩冶判官の妻の一行は窮地に立つ。少しく長文だが玄玖本を引いておく。

角テ追手ハ次第ニ勢重ル。矢種モ既ニ尽ケレバ、先女性ト少キ子トヲ差殺シテ腹ヲ切ラントテ、家ノ内ニ走入テ是ヲ見ルニ、アテヤカニシホレ侘タル女房ノ通夜ノ涙ニシヅミテ、サラズ共我ト消ヌト見ユルケシキナルガ、膝ノ傍ニ二人ノ子ヲ掻寄テ、(B)是ヤ如何ニセントアキレ迷ヘル有様ヲ見ルニ、其シモ武ク勇メル者共ナレドモ、落ル泪ニ目モ闇レテ、只惘然トシテ居タリケル。（約百五十字中略――八幡六郎が判官の次男を修行者に托すること）　（三386・367頁）

(C)塩冶ガ一族ニ山城守宗村ト申ケル者、内ヘ走リ入テ持タル太刀ヲ取直シ、雪ヨリモ清ク花ヨリモ妙ナル女房ノ胸ノ下ヲ切崎ニ、紅ノ血ヲ淋テツト突通セバ、アト云音ヘ出ニ聞テ、薄絹ノ下ニ臥給フ。(D)五ニ成ル少キ人、太刀ノ影ニ驚テ、ワット泣テ「母御ナフ」トテ空キ人ニ取付タルヲ、山城守心ツヨク掻懐テ、太刀ノ柄ヲ垣ニアテ諸共ニ鍔本マデ貫キテ抱付テゾ死ニケル。　（三388頁）

事態はいよいよ急追し塩冶の郎党は最期を覚悟する。郎党は女房・子供を殺さんと家の中に入ったもののその哀れな姿に為す術を知らない。そこで八幡の六郎は塩冶の三歳になる次男をとある辻堂の修行者

に托す。その後塩冶の一族の山城守宗村が心強くして塩冶の女房と長男を刺殺し、自らも刃に貫かれる。惨劇の最もクライマックスとも言うべき場面を玄玖本は殆んど筋書き的に簡潔に叙する。

究極的な筋の流れとしては玄玖本と同じであるが、天正本は右揭場面、約千九百余字を費やして詳述する。最も目立つことは殺す側（山城守宗村）と殺される側（女房）との葛藤が両者の対話によって構成されており、抜きさしならない状況に追い込まれた人間の心情の交錯を巧みに描くことである。更に玄玖本では中略部分に在る次男を修行者に托すことが、天正本ではすべての惨劇が終った後に位置する。[11] 以下、天正本をたどる。

(A)の部分、打ちしおれた女房の姿を天正本は次のように形容する。

終日終夜の心労に御姿いとゞ面疲て、暮行秋の女郎花の霜野に枯て残れるに、あだをきしたる白露の風を待間の心地して、己と消も失ぬべき

歌語を援用した流麗な文体で美文化をはかっており、これは天正本全体を通じてみえる傾向である。女房がわが子を抱き寄せ茫然とする様を玄玖本は「アキレ迷ヘル有様」(B) と傍観的に記すが、天正本は女房の発言を引き、潔い死への覚悟と子に対する不憫さを述べさせる。即ち女房の心情にまで入りこんでの叙述である。

女房と子供に刃を向けることが出来なかった若党共に対し山城守宗村は「云甲斐ナキ人々ノ有様哉」と恥しめ、自ら「大ノ太刀ヲ打ソバメ御台ヲ指殺奉ラント走懸」るが、やはり岩木の身ならねば女房を討つことが出来ず、太刀を抛って歎く。

アハレ弓矢トル身程心憂物ハヨモアラジ、名ヲ惜ミ、家ヲ思ズハ
是程イタハシキ事ヲバ見聞ジ物ヲ

これに対し女房は

トテモノガレヌ物故ニ、敵ニ見苦シキ有様ミヘテ後、ウキ名ヲ流サンモ心ウシ。早々、我ヲ失テ心安ク自害セヨ、[イ]ナドヤ是ホドマデニ云甲斐無クハ行跡ゾ、トク〳〵。

と山城守の決意を促すが彼は動かない。ついに女房は

トテモ行ベキ苔ノ下、何ノ時カハ劣ベキ、[ロ]其儀ナラバ力ナシ、刀ヲタベ。

と迫る。女房の強い態度に動かされ、山城守は涙を押えて立上がり太刀を取り直して、

是ホドノ御定ヲ奉ルベシトハ存ゼズ、不覚ノ行跡ヲバ御免候へ。

と女房を刺殺す。以上が玄玖本の(C)に相当する。玄玖本の叙述では山城守宗村及び女房の感情・意志は全く不明という他ない。天正本は主である女房を殺すことを余儀無くされ、そのことに逡巡する山城守と、彼の優柔さを(イ)・(ロ)の如き強い言葉で責める武人の妻らしい女房とのやり取りを対話で以て描く。玄玖本が事実経過のみを記すのに対し、天正本は山城守・女房のそれ〴〵の側の心にゆれにまで入りこんで叙述する。

惨劇は更に続く。玄玖本の(D)に見る如く塩冶の子は山城守の手で斬られるのだが、ここでも天正本の叙述は詳細である。母女房の死骸に取りすがり悶え泣く七歳の若君に向かって山城守は

弓矢ノ家ニ生サセ玉テハ、極楽ノ中ヨリ弓ノ本末ヲ知トコソ申伝タレ、早々御腹召テ母御ノ御伴申サセ玉へ。

と武士の子としての決意を促す。幼少ながら自らの不覚を恥じ若君は小鞘巻を抜き我腹に指し当てる。山城守は

痛ハシノ御事ヤ、若君成人シ玉ハヾ一家ノ主ト仰レテ、一国ノ諸大名仰冊キ奉リ、我等ガ末ノ子孫マデ、共ニ栄花ヲ待ベキニ、[ハ]思外ニ玉鉾ノ道辺ノ草葉ノ露諸共ニ消給テ、埋レン名ヲ後ノ世ニ流

サン事コソ悲ケレ。何ニ母上ノ御心苦思召ヲキツラン。トク〳〵追著進テ、御供セン。

と言いつつ若君と共に己が刃に指貫かれる。いとも簡単に若君を殺す玄玖本とは違い、天正本は若君を殺さねばならない辛い立場にある山城守の心の動きを丹念に叙述する。

悲劇の主人公の心情に密着して叙述する天正本の表現方法は、恐らく机上の製作のみでは成らなかったであろう。単なる事実経過よりも、感傷性に富んだ哀話の方により興味を示したであろう享受者の好尚を、何らかの形で反映しているように思う。[12] 天正本には「アハレ」・「早々」・「トク〳〵」・「痛ハシノ御事ヤ」（点線部）等、説経をはじめ語り物文芸に頻出する詞句が多用され、文章の美文化（傍線㈥）・会話文の多用とも併せて、何らかの口語りとして享受されたであろうことを思わせる。杉本圭三郎氏は『明徳記』の語りもの的詠嘆性に、より下層の享受者に迎えられる古浄瑠璃的語りものへの萌芽を見た[13]が、天正本の悲劇的葛藤場面にも同様のことが言えるかもしれない。ともあれ、天正本では別離・刑死・死別などの悲劇的状況における記事量の増加、感傷的側面の強調が目につくことを指摘しておく。

三、会話による場面進行

塩冶判官の女房と山城守宗村との葛藤場面は会話形式によって構成されていたが、単に地の文で筋書のみを記すのでなく、会話の挿入によって場面を進行させてゆくのも天正本の方法の一つと言えよう。

巻七「前朝伯州船上還幸事」を例にする。隠岐の御所を脱出した後醍醐天皇は舟人の好意によって海上へのがれ出たが、しばらくして追手の舟が迫る。

筑紫舟か、商人舟かと見れば、さもあらで隠岐判官清高が主上を追ひ奉る舟にてぞありける。㈠船頭これを見て、「かくては叶ひ候まじ、これに御隠れ候へ」と申して、主上と忠顕朝臣とをば、舟底にやどし進らせて、㈡その上にあひものとて、乾したる魚の入りたる俵を取積んで、水手、梶取その上に立雙びて、櫓をぞ押したりける。さる程に追手（約二十字中略）ここかしこ捜しけれども見出し奉らず。㈢「さてはこの舟には召されざりける。若し怪しき舟や通りつる」と問ひければ、船頭、「今夜の卯尅ばかりこそ、千波の湊を出で候ひつる船に、京上蔦かと覚え候ひて、冠とやらん着たる人と、立烏帽子着たる人と二人乗らせ給ひて候ひぬらん」㈢と申しければ、「さては疑ひもなきことなり。はや舟を押せ」とて（下略）

（『新校本』170・171頁）

追手に追いつかれ後醍醐は危機に陥るが、船頭の巧みな機転によって切りぬける場面である。神田本も会話を使ってはいるものの、天正本に比すれば単純な構成である。

まず傍線㈠に相当する部分、天正本では

忠顕是ヲミテ「如何セン」ト仰天セラレケルヲ、船頭「サノミナ御騒ギ候ソ。カクテ候ハン程ハ何程ノ事カ候ベキ」ト憑シゲニ申テ、

とあり、忠顕と船頭との対話から成り立つ。しかも追手の船を見て周章し騒ぐ千種忠顕と、それに対し全く落ち着いて余裕たっぷりの「憑シゲ」な船頭とが対照的で、いささか誇張さえも感じられる。㈡の部分は大きな違いはないが「俵を取積んで」の次に、

「恐ナガラ御宥免候ヘ」トテ

が入る。天皇を船底にかくし、その上に船頭が乗るのであるから右の程度の会釈は当然したであろう。神田本のように筋書きのみを述べるのではなく、天正本は場面・状況の細部をも丁寧に描写する。追手は

船中を探索したが後醍醐を発見できず、船頭に(C)のように尋問する。この部分、天正本では逆に船頭の方から先に質問した形をとる。

此船頭騒ヌ体ニテ「何ヲ御尋候ゾ」ト問ケレバ、「先帝今宵丑刻ニ隠岐国ヲ御逃有ル間、未ヨモ海上ヲバ過サセ給ハジトテ追進スル也」トゾ答ケル。

追手が誰を捜しているのかよく知りながら、全くとぼけ切って「騒ヌ体ニテ」たずねる船頭の形象は(A)の部分と同様である。更に(D)に相当する箇所は次の如くある。

トテ、ツ立挙リ手頭ヲ指テ「アレニ幽ニミユルコソ其ニテ候」ト教ケレバ、

かすかに見える船を御座船であろうと教え追手を欺く。ここにも船頭の余裕に満ちた態度がみてとれる。

後醍醐が窮地に追いこまれ船頭の機転によって危機を脱するという基本的な筋の流れは神田本と同じであるが、天正本は会話を多用し場面描写にふくらみを持たせている。船頭の余りにも余裕に満ちた態度はやや誇張気味であり、緊迫したこの場面の緊張感を却ってそぐ気がしないでもない。そうした欠陥はあるものの会話の使用は筋書きだけからはうかがえないその場の臨場感を出して有効である。

四、文章の美文化など

天正本全体に見られる顕著な傾向の一つに文章の美文化ということがある。以下、簡単に分類し例文を示す。

(1)歌語・漢詩句を挿入した表現

。此ハ二月廿三夜ノ事ナレバ、在明ノ月ハ出カネテ人里ミエヌ暗キ夜ニ、垣根ノ梅ガ香袖觸テ、ソコトモ知セ給ヌ道ヲ分タドラセ給ケル有様、何ニ比ヘン方モ無ク……（巻七「先帝船上臨幸事」）

(2)道行・名所尽くし的表現

。過ツル空ヲ帰ミテ、末ハト問ヘバ梓弓、山ハ鏡ト覚レドモ立寄ル陰モ無マヽニ、野路部ノ野風吹シホル磯辺ノ森ヲ打過テ、ナレヌ旅ネノ床ノ山、見ルベキ夢モイサヤ河、小野ノ細道草分テ、人目ヲ今ハ忍ブ坂、ノボレバ下ル東路ヤ、番馬ノ宿ニ着給ケル。

（巻九「両六波羅都落事」）

(3)様式的な比喩表現

。寄手五百余人ノ者共、大勢ノ真中ヘ乱入散々ニ被ニ切立一、嵐ニ木ノ葉ノ散ガ如ク片靡キニ門前ヘ颯ト引テゾ出タリケル

（巻一「土岐多治見等討死事」）

こうした美文化はどのような効果をもたらすか。(1)の例は隠岐の御所を密かに脱出した後醍醐天皇が深夜、港を目指す場面。港の方角も知らぬまま追手の目を恐れて彷徨う心細さと緊張感に満ちていたはずである。しかるに天正本は「在明ノ月」・「梅ガ香」という歌語を用い緊迫した状況に相応しくない。(2)は六波羅を追われた滅亡間近の北条仲時一行が東国さして落ち行く場面、彼らが自害した番場までの道行で他本には無い。軍記の道行文は、行く手には必ず悲劇が待ちうけるという状況の中で、流離の人物の心情と協和しつつ使用され、独自の効果を持つ。ここはその一般的規範に合致してはいる。一場面としての文章の洗練度は勝るが、太平記の筋の流れの中で見る時ややもすれば冗漫になるという評価上の褒貶は免れない。ともあれ天正体の著述者は、その修辞が効果的か否かの価値判断に問題は在るものの、文章の修辞に対して非常な興味を示した。そしてこの現象は著述者のみに係るのでなく、享受者層の問題とも併せ考える必要があろう。

五、後日譚への興味

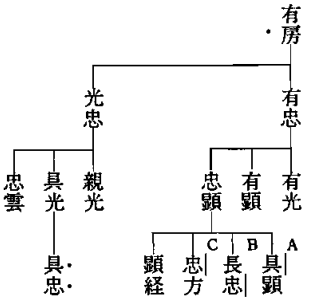
文章表現の問題ではないが天正本には或る種の人物に関する後日譚を多く載せる傾向がある。

巻二「資朝誅戮并阿新翔事」で父資朝の仇を討ち山伏の助力で命存えた阿新は「無レ恙成人シテ、南朝ノ君ニ仕テ日野ノ一跡ヲ光栄シテ中納言国光」になったという。『尊卑分脈』[14]に拠れば資朝には邦光なる子がおり、「候南朝中納言云々」（二、245頁）と注される。

巻七の後醍醐天皇隠岐脱出に功のあった千種忠顕については次のような後日譚がある。

是偏ニ忠顕ガ官女懐妊シテ、其ノ故ニ不慮ニヲ囲ヲ遁出タリ。若男子ナラバ、必ズ是ヲ家督ニ可レ立ト勅定アリケルコソ忝ケレ。果シテ男子也シカバ、成人ノ後朝庭ニ仕ヘ、具忠ト申ケルハ此人也。

『尊卑分脈』は次の如くで、忠顕の子としての具忠は確認できない。



（三、508頁）

あるいはA・B・Cの人物が混同したのかもしれない。これら二話は後醍醐に仕えた忠臣の子息のことを扱う。

同じく後醍醐の忠臣であった万里小路藤房は巻十三「藤房発心之事」で主上に諫言の後出家を遂げるが、天正本は彼のその後を次のように記す。

江湖遍参シ給シガ、何ナル前世之宿業ニカ有ケン、土州下向之船中ニテ、被レ侵ニ風波之難一、帰泉シ給ケルコソ哀ナレ。

遁世後の藤房については増田欣氏の好論[15]が指摘するように様々な伝承があったらしく、これもその一つであろう。

北条氏の旧臣にも藤房に似た男がいた。天正本のみが巻十一の末尾に記す工藤新左衛門入道である。彼は北条氏の有力な臣として天下に名を知られていたが、北条高時の政道正しからざるを憂い度々諫言するも効なく「世中味無ヤ思ケン」遁世し高野に籠もった。のち鎌倉全滅の由を聞き、その焼跡に赴き懐旧の涙を流し遂には散聖道人となり生涯を送ったという。

この他巻二十一の塩冶判官の子出雲殿のこと、巻三十七「畠山道誓関東没落事」の義深・国熙の末路のこと等が挙げられる。これら後日譚の登場人物は、いずれも政治権力の中枢で勢力を振い功成った側ではなく、どちらかと言えば敗者の側に位置する。敗れた者に対する興味だけでなく、志成らなかった人々への同情・好意が後日譚採取の契機となっていよう。またこれらの後日譚が史的事実に合致するか否かは確認し得ないことが多い。敗者の側ゆえ記録に残らなかったということもあろうが、大部分は伝承的なものを採用しているためであろう。巻二十一の塩冶判官の子の話には「……とかや」・「又云」等の表現がみられ、その痕跡をうかがわせる。天正本が後日譚を収集しているという事実は、敗者への同情、言わば判官びいき的心情に由ろうが、このことは悲劇好みという点で前述の悲傷性増加の傾向と根を同じくするように思う。それと共に、後日譚は一人の人物に関する話の結着を

つけることになり、個別的まとまりを重視する態度[15]と言える。即ち、章段末尾に評語を付して話を締めくくる傾向と相通うものがある。更には前述の様々な傾向の場合と同様、享受者の問題を無視できまい。話題の人物のその後がどうなったかという興味は何時の世も同じこと、おそらくはそうした大衆的次元の要求の反映でもあるのだろう。

六、天正本の特異性

如上、事実の指摘のみに留まるが天正本の性格の一端に触れ得たならば、所期の目的に達したことになる。

さて、私の主たる関心は上述の天正本の本文異同の様相が他の諸本の場合に比べて質的に異なるという点にある。天正本は既に指摘のある史実性・編年性といった歴史的事実に係る本文異同[17]のみでなく、文章表現の面でも全巻を通じた顕著な傾向がある。この傾向を太平記的なるものからの逸脱・崩れの現象[18]として規定し去ることも可能であろうが、私としては『太平記』の本文流動過程の中に上述の傾向を持った伝本が生じる余地が存在したことを重視したい。『太平記』はその成立当初から享受期に至るまで、常に政治権力と強く関わって来た作品であり、写本として伝わる伝本の少ないこと、本文異同の小さいこと等の現象がそのことをよく示していると思われるのだが、そうした厳しい制約下においても天正本のような性格の伝本が生まれたことは重要である。

『太平記』の本文異同の状況の具体的把握、本文異同発生の必然的因由の追究は諸本研究の最も重要な課題であり、未だ全面的な解答を得ていないが、本文異同の相当多くの部分は、『難太平記』にみるような武家の功名書き入れ要求という軍忠状的要素に拠るものということはほぼ定説化している。例えば古態本の中でも玄玖本には赤松氏関係の記事が多く、西源院本には佐々木氏の記事が多いという。そしてこれらの書き込みにもかかわらず、古態諸本の中では『太平記』の文学作品としての内質には殆んど変化は無いという重要な指摘がある。[20]ところが見て来たような天正本の性格は作品の内質の変化にも係り、他の諸本の本文異同の場合とは決定的に異なる。勿論、天正本にも功名書き入れ要求という「家」の問題が絡んでおり、佐々木京極家がその改訂に何らかの形で関与しているということはあろう。更には佐々木氏への資料提供者として二条良基周辺が想定出来る。天正本の史実性・記録性などの側面は、上層公家と有力武家の交流という考えで理解可能としても、小稿で検討した文章表現面での特徴は「家」の問題には還元出来ない。

後日譚への興味、何らかの口誦性を思わせる美文化、悲劇性強調の場面構成といった性格は、資料・記録等素材の問題ではなく、著述者の文学表現に係る問題である。そこにはおそらく遁世者・芸能の徒など下層階級の関与が予想され、更には享受者層の介在も考慮すべきであろう。従って天正本の改訂は一次的に成ったものではなく、時と人を異にした幾つかの段階を経ているとみるべきである。尤も、佐々木氏の管理下に或る種の芸能集団的な存在があったとすれば、一次的な改訂と考えるのに好都合だが妄想に過ぎないであろう。天正本の改訂過程及びその管理者の問題は更に今後の課題としたい。

以上、天正本のように『太平記』全巻に亘って文学作品としての質をも変化させる顕著な傾向を持った伝本は、諸本群の中で全く異質であることを強調した。他の諸本群と天正本の類との懸隔は極めて大きいと言わねばなるまい。換言すれば『太平記』の諸本は、天正本の類と非天正本の類の二類に大別することも可能であろう。

注

1、『太平記』の諸本研究の現状・問題点については大森北義「太平記諸本の研究について」（「私学研修」76号、昭和52年11月）がある。
2、桜井好朗「太平記の歴史叙述」（「文学」43巻5号、昭和50年5月）
3、鈴木登美恵「佐々木道誉をめぐる太平記の本文異同――天正本の類の増補改訂の立場について――」（「軍記と語り物」2号、昭和39年12月）、同「天正本太平記の考察」（「中世文学」12号、昭和42年5月）
4、但し、長谷川端氏による翻刻が近く公刊の由、仄聞する。
5、拙稿「天正本太平記成立試論」（「国語と国文学」53巻3号、昭和51年3月）
6、注3の「中世文学」12号の論文。
7、以下、天正本に対する古態本文としては神田本を用い、高橋貞一校訂『新校太平記、上・下』（昭和51年2月・9月、思文閣刊）の頁数を示す。なお神田本欠巻の場合は玄玖本に拠る。
8、天正本の類とは天正本・義輝本・野尻本の三本を指すが、小稿では天正本（彰考館蔵）に拠り、私に句読点・濁点を付す。
9、岡部周三『南北朝の虚像と実像――太平記の歴史学的考察――』（昭和50年6月、雄山閣刊）一七二頁。
10、『玄玖本太平記㈢』（昭和49年3月、勉誠社刊）に拠る。
11、「塩冶判官讒死事」の章段は、その後半部分（師直の讒言にあい塩冶判官が妻子一族と共に京を出奔、山名時氏等がこれを追撃、塩冶一族惨死）に限っても諸本による本文異同甚だしく、例えば塩冶一族の逃走経路のこと、記事順序のこと等検討すべき課題が多い。なおこの部分、諸本は玄玖本の類・西源院本の類・天正本の類の三類に大別出来る。問題の三歳の次男を修行者（天正本では遊行）に托すことの記事は、天正本では母女房の死の後に位置する（西源院本も同じ）。無惨な女房の死体の下から辛くも助け出されるという叙述は、玄玖本に比べより劇的と言うべきだろう。
12、天正本は惨劇の後に「其ノ里ノ村女、邑老マデモ、此有様ヲミテ、皆我親子ヲ失ヘル如ク、泣悲ケルトカヤ。誠ニ音ニ聞ダニモ哀也シ事ドモ也。」とあり、哀話に涙したであろう人々の姿を彷彿させる。
13、杉本圭三郎「『明徳記』の位置」（「日本文学誌要」16号、昭和41年11月）
14、新訂増補国史大系本に拠る。
15、増田欣『藤房説話の形成と漢籍の影響』（『『太平記』の比較文学的研究』所収、昭和51年3月、角川書店刊）
16、注5の旧稿で指摘した叙述の連続性・記事の集中化に配慮する傾向とも関連があろう。
17・18、注3の「中世文学」12号の論文。
19、拙稿「太平記の伝本に関する基礎的報告」（「軍記研究ノート」5号、昭和50年8月）
20、鈴木登美恵「古態の太平記の性格――本文改訂の面からの考察――」（「軍記と語り物」9号、昭和47年3月）

（追記）

脱稿後、初校までに、主に天正本の合戦場面の〝描写性〟について論述した次の二論考が出た。

・大森北義「天正本太平記の合戦記について」（鹿児島短期大学研究紀要」22号、昭和53年10月）
・同「天正本太平記の一性格」（『中世文学　資料と論考』所収、昭和53年11月、笠間書院刊）

Some Characteristics of "Tenshōbon-Taiheiki"

Shigeyuki NAGASHAKA

Summary

In some respects "Tenshōbon-Taiheiki" is crucially different from the other texts, additions of tragic qualities throughout the whole text, peculiar ending expressions of sentences and frequent uses of seguels to stories.